題名「君に聞こえない音」

あらすじ

中学一年生の杉村夏凛は、周りの空気を読まず、自分の好きな鳥の話ばかりをし続ける立花明希という子に出会った。小学校で陰口を叩かれるいじめを受けていた夏凛は、中学に入ってから陰口の対象が明希に変わっていることに気がついた。しかし明希は平然としていて、夏凛は明希は陰口が聞こえていないと思っていた。ある日明希は陰口に気づいていたと知り、本当に周りの声が聞こえていなかったのは自分だと、夏凛は気がついた。

「君に聞こえない音」

三時間目の終業を告げるチャイムが鳴った。
クラス委員が「起立」と言い、皆がバラバラに立ち上がる。気の抜けた声で「ありがとうございました」と言う。「直れ」の声も待たぬまま、すぐに教室中が騒がしくなる。皆が決まった相手のところに集まって、色んな話をする。内緒話をするみたいに、隠し事をするみたいに小さな声で話したり、かと思ったら、急に甲高い笑い声を上げたりする。それぞれの話し声が重なって、誰が何の話をしているのかは分からないけれど、その抑揚だけが大きな波を形作って、私を飲み込むみたいだった。
私は休み時間になると必ず、教室から出る。一年前から、ずっとそうしてきた。
前から二列目、左からも二列目の席。そこから私が立ち上がった時、左隣の席の立花明希も一緒に立ち上がった。私が机の間を縫い、後ろの扉に向かってズカズカ進んでいる時、明希はその後ろをピッタリと着いてきた。ガラガラと重い扉を引いて、廊下を右に進む。確実に、明希はまだ私の後ろにいる。ちらりと後ろを見てみると、やはり明希は私の真後ろを歩いていた。手を後ろに組んで、身体を左右に揺らしながらニコニコしている。彼女の長い前髪が、目に入りそうだ。私は前を向き直して、歩みを止めないまま「何」と言った。明希は、喜びの滲んだ声で「でさ」と言った。
「校庭によく白と黒の小さな鳥がいるでしょう。あれがハクセキレイです。ハクセキレイは元々冬鳥で住処も山や川の辺りだったのですが近年街中で一年中見られるようになりました」
「へえ」
「逆にハクセキレイによく似たキセキレイやセグロセキレイを見かけることが少なくなってきたので、ハクセキレイが住処を奪っているのかも知れません、ところでハクセキレイのオスとメスの見分け方はとても難しいと言われていて全体的に羽色が淡い方がメスなのですが」
「あっそう」
私は、出来るだけ興味がなさそうな声を出した。私だったら、話しかけた相手にこんな反応をされたら、すぐに話すのを止める。「ごめん」と言って、そそくさと踵を返す。でも、私は、明希が私の興味のなさに気が付いて、自分のしたい話を止めるような子ではないと知っていた。明希は私じゃないからだ。明希と出会ってからの二ヶ月間で、それを痛いほど思い知った。
私の通う北山中学校は、ごく普通の公立中学校だ。私含め、北山中学校に通うほとんどの生徒は、すぐ隣にある北山小学校から進学する。だけど、二割くらいの生徒は、同じ市

内の少し遠い小学校からやって来て、明希もそのうちの一人だった。
入学式の日、下駄箱で自分のクラスを確認した私は、一年二組の教室へと向かった。一年生の教室は五階にあって、階段でそこまで上らなくちゃいけないから、息が切れて大変だった。やっとの思いで教室に着き、呼吸を整えてから中へ入る。桜の木と「入学おめでとう」の文字がピンクのチョークで描かれている黒板の、右端の方に貼られている座席表を確認した。「杉村夏凛」の名前を探す。右から四列目の、一番後ろの席だ。ぱっと後ろを振り返る。入学式の日だからと、早く来すぎてしまったようで、教室にはまだほとんど人がいなかった。が、私の席の隣にはもうすでに誰かが座っていた。それが立花明希だった。
ゆっくりと鞄を下ろし、普段よりも丁寧に椅子を引いて座る。鞄からペンケースと書類を取り出す時、必要以上に忙しなく動いてみた。隣の席の人は、視界の右端でずっと止まったままだ。何をしているのか気になって、恐る恐る、目だけを右の方へと動かした。
その人は、机の上に置かれた何かを見ているようだった。机の上には、やけに大きくて分厚い本があった。光沢のある白い紙に、リアルな鳥の切り抜き写真が何枚も載っている。野鳥の図鑑だった。死神の鎌のようなクチバシを持った鮮赤色の鳥と目が合い、「ひっ」と声を出しそうになったが、なんとか抑え込んだ。
隣の席の人は、痛めそうなくらい低く首を下げて、少しも動かずにその図鑑を眺めていた。鎖骨くらいの長さの髪が垂れ下がっていて、顔はよく見えない。机の上には他に、彼女の物と思われる筆箱が置いてあった。箱型で、両面が開くタイプの筆箱だ。ほとんどの女子は高学年に上がる頃にはその形の筆箱からポーチ型のペンケースに買い替えていたので、少し驚いた。表面の紫の布が端の方から剥がれて、縁が鉛筆の黒鉛で汚れていたから、小学生の時に使っていた物をそのまま持ってきたのだと分かった。その筆箱には、リアルな鳥のステッカーが三枚、綺麗に整列して貼られていた。
こんな子は北山小では見たことがなかったから、おそらく別の小学校からやって来たんだろうと思った。無造作に下ろされた重い髪の毛先が、四方八方にはねている。低学年が使うような筆箱はボロボロで、よく見ると制服のブレザーの襟は外側に折れ曲がっていた。後ろめたさにも似た安堵感が、胸の底から湧き上がってくるのを感じた。
話しかけてみよう、と思った。中学では、ちゃんと友だちを作りたかったからだ。今日までずっと私を不安にさせていたのは、このことだった。小学校では、ろくに友だちができなかった。中学に上がったところで、北山小のメンバーは固定化しているから、今更私の入る隙間はどこにもないだろうし、チャンスがあるとしたら、不安と孤独を抱えてやって来る外部の人達しかいない、と考えていた。人に話しかけるのは苦手だったが、この隣の席の人になら何となく話しかけられそうな気がした。中学で、一番初めに隣の席になったこと、その偶然が、永遠に続く絆にでもなればいいと思った。
「あ、あの！はじめまして、だよね。私、杉村夏凛って言います。一年間、よ、よろしく……」

思ったよりも大きな声が出た。図鑑に集中している様子だったから、大きな声を出さないと気付いてもらえないかと思って、音量調節を間違えてしまったのだ。それなのに、彼女はピクリとも動かない。机の上の図鑑に釘付けで、こちらを見る素振りすらしなかった。

「えっと……立花明希ちゃん、だよね？あ、これは、さっき座席表で確認したんだけど」

一応、隣の席の人の名前は先に確認しておいた。この名前も、北山小にいる時には一度も耳にしたことがなかったから、彼女が外部から来た子だというのは、ほとんど確信に近かった。しかし、名前を呼んでもなお、彼女は反応しない。完全に無視されていた。もしかしたら私が知らないだけで、北山小の人だったのかも、と不安になる。北山小は一学年に二百人くらいの生徒がいたし、私は特に交友関係が狭かったから、その可能性も無くはない。北山小の人なら、私を無視するのにも納得だ。

気まずい沈黙が流れる。喉の奥が詰まって、息が止まりそうだった。新品の硬いスカートを、ぎゅっと強く握る。話しかけるんじゃなかった、とまで思ったが、いつまでも受け身で臆病な自分のままでいたくない、という気持ちを思い出した。何とかこの沈黙を打破しようと、必死に話題を探す。

「あ……明希ちゃんは、その。鳥が好きなの？」

初対面の人をいきなりちゃん付けで呼んでもいいんだっけ、と半ば泣きそうになりながら考えていたが、私が「鳥」と口にした瞬間、そんな考えは掻き消されるほどの勢いで、彼女は顔を上げてこちらを向いた。

「はい好きです」

まん丸で大きな黒目が二つ、じっと私を見つめていた。私は固まった。

「鳥は凄いんです、鳥の凄さを知っていますか。鳥は飛べるところが凄いです。鳥は獣脚類恐竜から進化して、軽量な中空骨格と羽毛を得たために揚力と推進力を生み出せるんです。推進力は主に初列風切が、揚力は次列風切が担っているとされています。ベルヌーイの定理によって空気流の差で揚力を発生させていていて」

ハキハキとした声で、立花明希は鳥について語り始めた。ショレツカザキリやベルヌーイが何かも分からないまま、話はどんどんと前へ進んでいく。返事をしてくれた嬉しさと、唐突な反応の変化への困惑で、話はほとんど耳に入らなかった。

「そ……そうなんだ……」

前のめりになりながら早口で鳥の話をする彼女を前に、そんな声を絞り出すので精一杯だった。

入学式を終え、体育館から教室へ戻ってきてもなお、明希はさっきの続きと言って鳥の話をし続けた。私はそれに、延々と相槌を打っていた。校長先生の祝辞を茶化したり、担任の稲瀬先生と話をしたりしている、周りのクラスメイト達が羨ましかった。

その日から毎日、明希は私に鳥の話をした。休み時間になると必ず、教室から出ていく

私に着いてきて、鳥の話をする。授業が始まっても話を続けようとした時は、流石に「後でちゃんと聞くから」と言って制止した。放課後には、彼女が録ってきた野鳥の声を、嫌になるほど聞かされた。

入学式から一週間ほどが経ったある日、私はついに「ベルヌーイの定理」が何なのかを、明希に尋ねた。今まで話してくれたこと、ほとんど頭に入っていなかったと言った。明希は喜んでいた。その日から、明希の話は比較的分かりやすくなった一方で、倍以上に話す量が増えた。明希によれば、「初心者向けの話をしてあげている」らしい。

五月に入って、初めての席替えが行われた。稲瀬先生は、エクセルを使って、予めランダムに席を抽選をしておいたと言った。エクセルはこういう時便利なんだと言った。隣の席同士じゃなくなっても、明希は変わらず私に着いてくるのだろうか。少しの寂しさと、彼女を心配する気持ちがあった。席替え結果が前方のスクリーンに投影される。私の名前は、前から二列目、左からも二列目の位置にあって、その左隣には、立花明希と書かれていた。

「鳥には人間のような耳介はありませんが耳孔はちゃんとあるんですよ。鳥は大抵人間よりも可聴域が狭いんです具体的に言うと200ヘルツから8000ヘルツほどで」

「へえ……そうなんだ。あ、もうトイレ着いたから。続きは後でね」

廊下の奥にあるトイレの前で私は振り返り、明希の目を見てそう言った。明希はすぐに口をつぐむと、廊下の白い壁に沿うようにして、ずるりとその場にしゃがみ込んだ。私がトイレに着くと、明希は毎回トイレ前の廊下で体育座りをする。飼い犬みたいに、私の帰りを待っている。

一番奥の個室へ入り、小さな溜息をつく。

小六の夏頃から、休み時間は必ずトイレの個室で過ごすようになった。扉の外からぼんやりと聞こえてくる話し声や笑い声が怖くて、両手で耳を塞ぎながら、じっと休み時間が終わるのを待っていた。休み時間が終わるギリギリになって、外にいる人の数が減ってきた頃に、こそこそと一人で教室へと戻るのだ。

中学生になってからも、その習慣は続いた。しかし、明希が着いてくるとなると、話は別だ。明希が外で待っている。別に、今までそうしてきたように、チャイムが鳴る直前になってから外へ出たって良かった。明希は、嘘も冗談も言葉通りに受け取ってしまうような子だから、トイレに長時間いる理由だって、簡単に誤魔化せただろう。

左腕にきつく巻かれた腕時計を、ちらりと見る。個室に入ってから、ちょうど一分くらい経っただろうか。私は深く溜息をついて、金属のレバーを力一杯足で踏みつけた。

手を洗ってトイレの外へ出ると、明希は一分前と全く同じ姿勢で床に座っていた。私が戻ったのに気がつくと、明希は怒ったような顔をして「君、トイレ行きすぎですよ」と言った。私は「しょうがないの」と言って笑った。

廊下の一番奥で、白い壁にもたれ掛かりながら、私達は並んで話し始めた。明希のツバメみたいな声が、私の左耳をくすぐっている。
「でも代わりに音の弁別能力が非常に高くて人間よりも細かい音の違いがわかると言われています例えばオウムなんかが声を真似られるのはこのためです。」
「ふーん……」
ふと、右上の小さなガラス窓が、水滴で濡らされているのを見つけた。雨、降ってるんだ。じゃあ、五時間目の体育は保健体育に変わるかも、と思ったら、自然と頬が緩んだ。
「第一次世界大戦中のフランスではこの能力を活かして、接近した敵機を見分けるためにオウムを飼っていて――」
窓を眺めていたら、明希は突然、急ブレーキをかけたみたいに話すのを止めた。途端に世界が静かになって、驚く。私はすぐに左を向いて、硬直している明希の姿を見た。明希は真っ黒な円い瞳で、正面の何もない空間を見つめていた。
どうしたの、と聞こうとした、その時だった。
「あー、あいつ？」
低くてガサついた、ハシボソガラスみたいな声が、私の耳を貫いた。瞬間、鋭い痛みが胸を締め付けて、呼吸が止まる。
「そうっす。髪ボサボサで、見るからにヤバそうな方」
男二人組が、前から歩いてくる。心の中で、やめて、と唱えた。心臓の動きが、速さを増している。
「あいつがマジで、頭おかしいんすよ」
二人が私達の前を通り抜けて、階段を降りていく時、抑えるような笑い声が聞こえた。
その瞬間、それまで聞こえていなかった周囲の雑音が、一気に耳に飛び込んできた。扉の前で談笑する女子生徒達の話し声も、廊下を走って笑う男子達の叫び声も、息を吹き返したかのように鮮明になって、耳の周りで轟々と反響した。私のすぐ側で、雨粒が激しく窓に打ちつけていた。
脳が急速に冷えていく。全身から血の気が引いた。
「え、ガチでそれ。あいつウザすぎ」
周囲にいる全員の会話が、断片的に聞こえてくる。呼吸と心拍が速まって、足の裏の感覚が遠のいた。膝が震えて、目の奥が染みる。唇を強く噛んで、足元のタイルを睨みつける。右腕は軽く持ち上げられたまま強張って、中途半端な状態で固まっていた。
「ウケるんだけど。マジ最高だわ」
「あいつら、本当に最低だな」
世界が、私達を嗤う声で溢れていて、うるさい。身体の支配権を取り戻そうと、わざとらしいくらいにゆっくりと呼吸をする。こういう時はいつも、全ての声に怯えていた、あの頃の私が蘇る。これをすぐに、どこか遠い所へ帰さなくてはならない。ぎゅっと目を閉じては、細く冷たい息を漏らした。

明滅する視界の中で私は、迫り来る荒波を見た。

「あの」小さく、ツバメが鳴いた。「君、なんで固まってるんですか？」

はっと顔を上げる。視界が眩しくて、痛い。その光の中心で明希が、何でもないみたいな顔をして、笑いながら私の顔を覗き込んでいた。

「明希……」

その健気で純朴な瞳を、何も理解出来ていないような様子を見て、私は酷く安心した。と同時に、嫉妬のような、憎悪のような、暗く浅ましい火が胸の最奥で灯るのを感じた。

「なんでって、明希が先に話すのやめたんじゃん」

「え？そうなんですか？」

明希は本気で分からないと言った顔をした。私は「なに、それ」と言って、ふっと息を吐き、それ以上何も言えなかった。

「あれ、どこまで話しましたっけ」

明希は、私の置き去りにされた右手を、ぱっと掴みながらそう言った。途端に全身の力が抜けて、私の右手は、明希の小さな掌の中に落ちた。

「鳥の聴力についての話でしょ」

なんだか目が合わせられなかった。心配や同情よりも、やっぱり、もっと汚い感情が私の中にはある。それを改めて自覚した。

「ああ、そうでした。教えてくれてありがとうございます。うん。じゃあ」

明希は再び話を始めた。手は繋がれたままだった。一年二組の教室は廊下の反対側に位置するが、チャイムが鳴ってから走り出してもギリギリ間に合う。しょうがないから私は、また冷淡な相槌を打った。

明希が話を始めると、だんだんと周囲の声が遠ざかる。世界の音が、明希の声と、私のつまらなそうな相槌だけになる。猥雑な話し声も、嘲るような笑い声も、もう聞こえない。

だから、中学に入ってからの休み時間は、前みたいに苦しくなかったのに。

なんでさっき、いきなり話すのを止めてしまったの、と。駄々を捏ねる子どもみたいに、恨みがましく咎めることは、しなかった。

小学六年生の秋、夏休みが明けてすぐのことだった。私が社会の調べ学習の発表を終えた後、クラスの一部の女子たちが身を寄せ合って何か話しているのが聞こえた。その時は少し嫌な気持ちがしたけど、特に気にしてはいなかった。

その後も体育の時間や、授業で問題に答える時など、ことあるごとに笑い声と陰口が聞こえてきた。三日もすれば、それが自分へ向けられたものだと分かった。

ある日私がそのことを友だちに話すと、友だちは気まずそうな顔をして、「多分、SNSの投稿じゃないかな……」とだけ答えた。その日から、友だちは私のことを避けるように

なった。
陰口をよく言っていたのは、カースト上位の菅野さんだった。その周りにいる鈴木さんや牧野さんも、おそらくその悪口に乗っかっていたはずだ。
多分、私がSNSで好きなアイドルについての話をしたから、菅野さんたちもそのアイドルが好きで、それが癪に障ったんだろう。私はすぐにアカウントを消し、そのアイドルのグッズをペンケースから外した。
次第に陰口はクラス中に広まり、冬休みに入る頃には学年中のみんなが私を無視し、悪口を言っていた。
教室へ行くのが怖くなって、話し声が全て自分への悪口に聞こえた。笑い声を聞くたびに動悸がする。休み時間は特に怖くて、私は毎回トイレへと逃げ込んだ。それが卒業まで続いたのだ。
中学に入ってからも、初めは北山小から来たみんながまだ私の悪口を言っていると思っていた。実際、聞き馴染みのあるクスクスとした笑い声が、教室中のあちこちから聞こえてきた。休み時間にトイレへ逃げ込むことも続けた。そこに、明希が着いて来た。色んな鳥の話をしながら。初めは困惑し、迷惑だと思った。でも、明希の話を聞いているうちに、だんだんと周囲の話し声が聞こえなくなることに気がついた。明希と一緒に、廊下の端のトイレまで向かい、その後は廊下の奥で明希と鳥の話をする。そんな休み時間が習慣になった。
だから、クラスのみんなが指を差して嗤っているのは、私ではなく明希だということに、入学から二週間ほど経ってようやく気がついた。
四月、初めてのホームルームで、稲瀬先生が自己紹介を終えた後、「何か他に、僕について知りたいことはあるかな」と言った。小学生低学年じゃあるまいし、誰も手なんか上げないでしょ、と私を含めクラス中の大半の生徒が思っていた。そんな中、私の右隣から、「はい！」と、切り裂くような声がした。驚いて右を向くと、立花明希が指先を揃えて、真っ直ぐに右腕を伸ばしていた。その潑剌とした声と、勢いよく伸ばされた手に、稲瀬先生も圧倒されていた。
「じゃ、じゃあ…ええと。立花」
手元の座席表を見ながら、先生は明希を指名した。明希はすっと席から立ち上がり、大きく息を吸って、「先生の、好きな鳥は何ですか！」と言った。
初めての生物の授業は、ヒトの遺伝子についての授業だった。にも関わらず、明希は何度も手を上げて、鳥の遺伝子についての質問をした。その日九回目の挙手の時、温厚そうな生物の女性教師は、「いい加減にしなさい」と言って明希を叱った。
掃除の時間、稲瀬先生が教室から居なくなった途端、皆が堰を切ったように口を開き始めた。床のゴミは箒で隅の方に寄せ、机は引き摺って運び、「稲瀬、ウザすぎ」といった愚痴の言い合いに花を咲かせていた。
「机、引き摺ったらダメです！喋るのもダメ！掃除、ちゃんとやってください！」

明希は教卓の前で、ちりとりを握った手を震わせながらそう叫んだ。皆が明希の方を向き、教室中が鎮まり返る。明希はその静寂に満足し、隅に寄せられたゴミを丁寧に回収し始めた。

明希が皆の前で声を出す度、あちこちから密やかな笑い声が上がる。でも、少なくとも初めの二週間の間私は、その笑い声が明希の隣で俯く私に向けられているのだと思い込んでいた。

入学から二週間ほどが経ったある日、私の陰口を叩いていた菅野さん一行に、お昼ご飯を一緒に食べないかと誘われた。私は驚いた。不信感や、反発する気持ちもあった。しかし、それ以上の安堵と喜びが胸を包んだのも事実だった。しがみつくような思いで、私はその誘いに乗った。

その日、お昼ご飯を食べる中で、私は真実を知った。笑われていたのは、私ではなかった。明希が、私の身代わりになっていたのだ。菅野さんは、「あいつ毎回授業止めるし、本当迷惑だから、みんな嫌ってるよ？」と言った。「だから夏凛も、あんなやつに構わなくていいって」と、一人でお弁当を食べている明希の方をチラチラと見ながら言っていた。

明希は、私に降りかかり続けるはずだった悪意の全てを、代わりに引き受けてくれたのだ。

私への陰口じゃないと分かってもなお、辺りを包む人の話し声は怖かったし、いつ標的が私に戻るか分からない不安も残り続けた。明希への陰口だと分かっていても、聞くたびに自分に言われているかのような動悸がした。

だからこそ、明希がする鳥の話にも、私は救われた。彼女のハキハキとした声、前のめりに畳み掛ける話し方、それらに耳を傾けているだけで、他の全ての雑音は耳に入らなくなった。

明希の、柔軟性のない頭でっかちな真面目さのことを、皆は嫌った。ウザいと言った。でも私は、そこも含めて明希のことを嫌いにはなれなかった。

だから、席替え後の二者面談で、仕方なかったんだとでも言うような顔をして、「ごめんな」と言った稲瀬先生のことは、私もそこまで好きじゃない。

だけど同時に、私は誰よりも明希の不幸を望み、誰よりも明希のことを憎んでいた。

菅野さん達とお昼ご飯を食べたその日から、私は明希の話にわざと冷たい相槌を打つようになった。相手の気持ちを考えず、ベラベラと自分のしたい話をする、自分勝手で迷惑な立花明希に、付き合わされている可哀想な被害者を演じた。自分が再び、陰口の対象になることを防ぐためだ。立花明希と仲良くしている姿なんて、見られたらおしまいだ。幸い、明希は私がどれだけ無関心な反応をしても、それを気にすることはなかった。

また明希は、自分自身に向けられた陰口に気がついていない様子だった。授業中に上がる笑い声も、廊下で交わされる悪意の応酬も、彼女には届いていないのだ。どれだけ馬鹿にされ、邪険にされても、明希は何も分からないといった様子で、変わらずニコニコして

いた。
皆の陰口が、隠された悪意が、明希には聞こえない。
クラス中のみんなが、そう考えていた。だからみんなは、陰口の中で明希の名前を明言しなかったし、皮肉を込めた言い回しで彼女のことを揶揄した。「どうして笑っているのですか」と明希が尋ねた時、菅野さんは、「明希ちゃんが、すーっごく面白いから！」と返していた。明希は笑っていた。
明希のこの様子が、私はどうしようもなく憎かった。羨ましくて、腹立たしかった。私はあの人達の悪意に晒されてから、全ての声に怯えて、相手の顔色を窺って、苦しみながら生きる羽目になっているのに。明希はそれに気がつかないで、幸せそうに笑っている。いつだって楽しそうに、私に向かって鳥の話をする。こんなのって不条理だ。
私が明希だったら、明希くらい——だったら、何にも聞こえないままで、笑えたのかな。
私は、明希に傷付いてほしくない。そう思っている、と思っていた。教室中から笑い声が上がった後、隣の席の明希の無垢な笑顔を見るたびに、聞こえてなくて良かったと安堵する気持ちがあって、そのすぐ側に、それをぐちゃぐちゃに壊したくなるような気持ちがあった。
私は、明希に傷付いてほしかった。クラスのみんなが明希のことを馬鹿にして、迷惑がって、嫌ってることに気がついてほしかった。私と同じように、怯えて、隠れて、泣いてほしかった。そうしたら、今度は私があんたの耳を塞ぐから。それで、私と平等に苦しんでくれたら、私の気持ちはようやく晴らされるのだ、と思った。
この矛盾が、胸の内を静かに掻き回している。明希に向ける相槌は、この憎悪の塊を乱暴に包み込んでいて、ますます無愛想なものになった。どんなに吐き捨てるように言葉を放っても、彼女は黒色の滲んだその音を聞き取れない。
私は、明希を利用しながら、八つ当たりのような憎悪の火を燃やし続ける、最低な人間だ。明希は最低な私に騙されていて、それがどうしようもなく可哀想に思えた。

四時間目の終業を告げるチャイムが鳴った。
挨拶を終えると、立ち所に辺りの音が膨れ上がる。でも、すぐにその騒々しさは遠ざかった。お昼ご飯の時間だから、みんなは手を洗いに行ったんだ。そのまま戻って来なくてもいいよ、と思った。
ぐっと目を閉じて、伸びをした。微かな痺れが全身を通過して、息を吐きながら目を開ける。後ろから、三人分の足音が聞こてきた。少しだけ、身体が強張る。
「夏凛ー」
案の定、菅野さんが私の名前を呼んだ。あなた達のことなんて全く意識していませんでしたよ、といった顔をして、ゆっくりと振り返る。
「ん？なにー？」

「お昼ご飯、一緒に食べよ？」
今日も誘ってくれて良かった、と思いながら私は「ああ、いいよ」と言った。菅野さんは、「やったー」と言って、牧原さんと鈴木さんの方を向き、前方の扉に向かって歩き出した。私は慌てて立ち上がり、お弁当袋と水筒を持って三人の後を追った。
あの日から、菅野さん達は毎日私を昼食に誘うようになった。ただの気まぐれか揶揄いだと思っていたから、それが一週間も続くとなると、どこか期待してしまう自分がいた。それでも、いつ彼女らが再び私に牙を向くか分からないし、それは私の制御できる範疇ではなかったから、改めて誘われるたびに私は安心し、満たされた。
四人で手を洗い、教室へと戻る。菅野さんの席に合わせて周りの三つの机を動かし、一つの島を作った。その時、隅っこの窓際の席で、一人早くもお弁当を食べ始めている明希が目に入り、さっと目を逸らした。
席に着き、お弁当を広げる。
「あー、稲瀬の授業マジつまんなかった。私最前列で堂々と寝てたんだけど、ヤバくない？」
「ねえそれはヤバい、あいつ寝てたらみんなの前で説教するらしいよ？」
「あーそれ、私も三組の人から聞いた。急に教卓叩いて、大声で立てって言ったって」
「えマジ？立たせるって、昭和かよ。でもうちもう諦められてるから、稲瀬から見放されてるから」
三人が大きな声で笑った。遅れて私も同じくらい大きな声で、「あはは」と笑った。でも稲瀬先生が、二組で大きな声を出して怒っているところは見たことがなかったから、驚いた。二組の人を呼び出して廊下で説教をしているところは、たまに見かけるけど。
「夏凛はどの授業でも寝ないから凄いよねー。夏凛くらいしか起きてない授業多いし」
菅野さんが、箸でプチトマトをつまみながらそう言った。
「そ、そうなの？凄い、かな」
急に自分の話になって、戸惑う。
「凄い凄い、真面目って感じで」菅野さんは、自分の手元のプチトマトを見つめていた。
「後でさ。数学と、あとー生物のノート、見せてよ」
まっ赤な球体が、彼女の口の中に、ぽいっと放り込まれた。
「あ、私も見たい。寝かけてたから字ぐちゃぐちゃなんだよね」目の前に座る牧原さんが、私の方へ身を乗り出しながら言った。「いい？」
艶のある黒い長髪が、肩からサラサラと流れ落ちるのが、やけに目についた。
「あ……うん。分かった」
私は口角を引き上げながら、そう答えた。
初めてお昼ご飯に誘われた日、三人にそれとなくどうして急に私を誘ってくれたのか尋ねてみた。そうしたら菅野さんは、「ずっと夏凛ちゃんと話してみたかったから」と言った。陰口を叩いていたのだから、それは嘘だろう。その後に続けて、「あと……あいつに

付き合わされてる夏凛が可哀想だと思って」と明希の方を横目で見ながら言った。
　ああ多分、明希を孤立させたいんだ。その方が面白いから。私はその時、そう納得した。明希には申し訳なかったが、私は、それでも菅野さん達に受け入れられることが嬉しかった。嫌われていないことに安心した。
　でも、心のどこかに、彼女らが私に向ける笑顔への不信感があって、私はそれを必死に見ないようにした。
「え、てかさー。さっきの『G』、ヤバくなかった？」
　鈴木さんが囁くようにそう口にした瞬間、箸を持つ手が一回、ピクリと震えた。
「あー、ね。急に『あのっ！』とか言って手上げだしたから、目覚めたわ」
「最近は全然授業中に手上げなくなってたのにね」
　みんな、途端に声が小さくなった。明希の話だ。私はぐっと手に力を込めて、必死に笑顔を保った。
「でさ、何、また鳥の質問？今数学の授業中ですけど？とか思ってたら、急に『外、出てもいいですか！』って」
　鈴木さんが、喉を弾いてカッカッと鳴らす笑い方をした。
「ほんっと、頭おかしいわ」
　菅野さんが、明希の方を睨みながら、鼻で笑った。私は必死に息を吐き出して、肩をすくめてみたけど、上手く笑えなかった。
　四時間目の授業中、明希は突然勢いよく手を上げた。稲瀬先生が「なんだ」と聞くと、明希は立ち上がりながら「外、出てもいいですか！」と言った。寝ていた生徒も何人か起き上がり、驚いて彼女の方を見た。私は横で唖然としていた。稲瀬先生は、すぐに「いや、ダメだ。席に着きなさい」と答えた。明希は席には座らず、「なんでですか」と叫んだ。小さな声で、「え？」とか「はあ？」とか言うのが聞こえた。先生は、「今は授業中で、授業中はトイレ等の理由がない限り外に出てはいけないからだ」と落ち着いた声で説明した。明希はそれを聞くと、納得した様子ですとんと席に座った。クラス中が騒然としていたが、稲瀬先生は何事もなかったかのように、黒板に文字式を書き始めた。葉擦れのような含み笑いの渦の中で、「いや、『G』すぎるでしょ」という呟き声が聞こえた。
　私はその間ずっと、机の木目を見つめていた。
「いやー、前から頭おかしいとは思ってたけど、ここまでとは思ってなかったわ。授業中いきなり外出ようとするって、何？」
「その時、外、豪雨だったのにね」
「雨にでも打たれたかったんじゃん？『G』の考えることなんて、うちらみたいな普通の人には理解できないでしょ。したくもないし」
　菅野さんは、会話の中で自然と明希のことを「G」と呼んだ。これは、いつからかクラス内で広まっていた、彼女のことを指す隠語だった。明希が陰口に気づかないために、クラスの男子の誰かが考えた呼び方らしい。

この呼び方を聞くたびに、私は心底、このクラスの人たちに辟易する。ゴミ捨て場に溜まった水溜りを啜らされているような、嫌な気持ちになる。その言葉には、悪意が極限まで染み込んでいて、その妙な質量がどこまでも悍ましかった。「G」が、一体どのような由来で名付けられたものなのか、みんなが自然に理解して、みんながわざと黙っている。私はその最低な人たちに、声を上げて抗議することすら出来ない。自分が嫌われないために、ただ黙って微笑を浮かべることしか出来ないのだ。それが何よりもの絶望だった。

「でもまあ、前みたいなキモい鳥の質問じゃなくてよかったけど」

「あ、確かに。キモいのは相変わらずだけど、意外とすぐ話し終わったしねー」

明希への風当たりが弱まるのを感じて、私は咄嗟に身を乗り出し、「そ、それな!」と言った。思ったよりも大きな声が出てしまったことに驚き、箸でつまんでいた卵焼きがぽとっと落ちる。喉が突然開いたから、不自然な勢いがついてしまった。牧原さんがそんな私を見て、口元に手を当てて優しく笑った。他二人は私の方を一瞬向いて、「声デカ」と鼻で笑った。

明希は、入学から二週間ほどが経った頃、それまでどんな授業の中でも繰り返し続けてきた鳥の質問を、突然辞めた。みんなは、先生に怒られすぎたからだと解釈していたが、私はそうは思わなかった。私だけが、本当の理由を知っていた。

菅野さん達と初めてお昼ご飯を食べたあの日以降、私は明希に冷たい相槌を打つようになった。にも関わらず、彼女はそれを気にして話を止めることも、会話を減らすこともしなかった。私はそれに苛立った。気づけよ、と思った。

その時、ちょっとした加虐心、もしくは好奇心が膨らんで、それがある日破裂した。

それから三日くらいが経ったある日、朝、いつも通り話しかけてくる明希のことを、私は無視した。視線すら向けなかった。私が無視をしたところで、明希はそれすら気にすることはなく、無反応を貫く私に向かって話しかけ続けるだろうと思っていた。

違った。その日、一時間目の授業で明希は、一度も手を上げなかった。一時間目の授業が終わり、私がトイレへと向かった時、明希はその後ろを着いてこなかった。その時一人で通った廊下は、いつもよりも長く感じて、耳を塞ぎたくなるほどに喧しくて、眩暈がした。外で明希は待っていなかったが、トイレに長時間篭ることはしなかった。明希の様子が気になったから、一分も経たずに個室を出て、教室へと戻った。

明希は一人俯いて、貧乏ゆすりをしながら席に座っていた。私が隣の席に座ってもなお俯いたままで、ボソボソと何か言っているのが聞こえた。普段とは大きく異なる様子に、流石に声をかけようかと思った。が、私は意地を張ってしまい、その日だけは無視を続けようと決めた。

二時間目以降の授業でも、明希は一度も手を上げなかった。休み時間にも私に着いてくることはなく、ずっと黙っていて、たまに髪を掻きむしったり爪を噛んだりしていた。菅野さんと鈴木さんは、「なんか今日あいつ静かじゃね?」「助かるわー」と話していた。

次の日、私は朝一番に明希に謝った。「無視してごめん。私はもっと明希の話を聞きたいし、これからは無視なんて絶対しないから」と言ったら、明希はゆっくりと顔を上げて、泣きそうな顔をしながら、弱々しく私を睨んだ。
「……なんで、昨日は無視したんですか。なんで、今日は無視しないんですか」
私は狼狽えた。理由のような加虐心は確かにあったが、そんなものを赤裸々に言葉にしたら、今度は私が明希に無視されてしまう。曖昧に答えても良かったのかもしれないが、その潤んだ瞳の中に私は、誤魔化しの通用しないような、真剣で切実な眼差しを見た。必死に、それらしい理由を考える。そこで昨日の菅野さんと鈴木さんの会話を思い出した。
「あ……あの、明希が授業中に手上げて、鳥の質問するやつ。あれが嫌になって、無視してた。それで昨日は手、上げてなかったから、今日は無視してない」
言葉を選びながら、なんとか論理立てて答える。私は他のクラスメイト達とは違って、そこまで明希のする鳥の質問を迷惑とは思わない。けれど、昨日は授業中に嫌な笑い声が上がることがなくて、息がしやすかった。だから嘘とも言い切れない、丁度良い理由だと思った。
「君も嫌がるんですか。それはなんでですか」
明希は悲しげな顔をして、それでもはっきりとそう言った。
「それは……単純に、授業の進みが遅くなるからじゃない？」
正直に答えようとしたら、自分が迷惑がっているという体を忘れて、私はクラスメイトの代弁者になってしまった。言い終わってから「あ、間違えた」と思った。それに気づいたのかは分からないけれど、明希は途端にふっと笑った。
「あ、そうですか。そうなんですね。じゃあ、やめます。ふふ、あはは。君は、嬉しい人ですね」
「……嬉しい人って何？」
「君は、質問したら、ちゃんと答えてくれる。だから嬉しい人です」
「それ、嬉しいのはあんたじゃん」と言って、私も笑った。
その日から、明希が授業中に手を上げることは無くなった。

だから、今日突然明希が手を上げた時は、私も肝が冷えた。続けて口から出てきた言葉も、到底理解できるようなものではなかったから、余計に焦った。また明希が笑われる、陰口を叩かれると思ったら、途端に胸が締め付けられた。
どうして明希はいきなり、あんなことを言ったんだろう。
そうぼんやりと考えながら箸を動かしていたら、牧原さんが思い出したように口を開いた。
「あ、そういえば。さっきは暴風雨だったけどさ、今は雨止んで、快晴らしいよ」
「え、マジ？ゲリラ豪雨ってやつ？じゃあ五時間目の体育やんの？」
「水溜りとかありそうだし、グラウンド濡れてそうだけど、武内先生は強行しそう」

牧原さんがクスっと笑った。菅野さんは「やったー！」と大きな声を上げた。私は必死に落胆を隠した。

今の体育は、体育祭に向けたリレーの練習で、足の遅い私にとっては地獄だった。でも菅野さんは足が速いから、活躍できて嬉しいみたいだ。特にクラス委員の小泉くんのことが好きで、リレー順を小泉くんの次にしたから、バトンを手渡して貰えると言っていた。

その後はずっと、彼女たちの恋バナが続いた。明希の話題には、一度も戻らなかった。

私がデザートの蒟蒻ゼリーを吸っている時、他三人はもう既にお弁当を食べ終えていた。

「じゃあうちら先に更衣室行ってるから」

鈴木さんは体操着袋を肩に掛けながらそう言った。

「夏凛ちゃんもあとでね」

牧原さんが手をヒラヒラと振りながら言った。

「あ、ノートはうちの机の上置いておいて。今日中に返すからさ、いいよね？」

菅野さんがニッコリと笑った。涙袋がぷっくりと盛り上がり、白色のシュシュで高く束ねられた、茶色がかった細い髪の束がふわりと揺れる。

私はゼリーを口に咥えながら、激しく首を縦に振った。

五時間目の始業を告げるチャイムが、少し遠くの方から聞こえた。

校庭は、さっきまでの豪雨が嘘のような、雲一つない快晴だった。柔らかな初夏の日差しが、真っ白なグラウンドに反射して、その眩さに目を細める。点在する水溜りが、キラキラと光っていた。

背の順に並んで体育座りをする。周りの人たちは皆、近くの友だちと、晴れた空に対する不満を溢し合っていた。武内先生は、手元の黒い板を見ながら出席を確認している。

「おい、立花は？」

武内先生がそう口にすると、話し声の波が次第に引いていった。私は、抱えた膝の中にうずめていた頭を勢いよく上げ、すぐに辺りを見渡した。確かに、明希がどこにもいない。

いや、いた。靴箱の方から、小走りで向かって来るのが小さく見えた。胸を撫で下ろす一方で、普段ルールや時間を厳守する明希が、授業の開始に遅れることを不思議に思った。

もっと速く走って、早くみんなの中に入らないと、この人たちはまた――

「あ、あっちから走って来てる」

「何、遅刻？走り方キモ」

「『G』の分際で、俺ら――者の時間奪うとかありえねー」

やっぱり、始まった。耳鳴りがして、一瞬、辺りの音が遠ざかる。額にじわりと汗が滲む。溜息を吐いた後、私は再び、抱えた膝と腕の間に頭を深く押し込んだ。薄暗い視界の

中、速さを増す自分の心拍が、よく聞こえた。
砂の上を駆ける足音が近づいてくるたび、周囲の話し声が段々と小さくなった。
「すみません、遅れてしまいました」
明希は息を切らしながら、クラス全員の前でそう言った。もうほとんどの人が黙っていた。
「あの、靴箱の裏に」
「あーもういいから。お前、授業遅らせてんだよ。とっとと並べ」
遅れた理由を説明しようとした明希を遮り、武内先生は私たちの並ぶ列の方を指差した。太くて短い、焦茶色の指だ。明希は一瞬躊躇った後、すぐに走って列へと向かった。
私たちが体操の隊形に広がって、明希がその列に合流したことを確認すると、武内先生はカセットのボタンを乱暴に押した。
準備体操を終え、元の隊形に戻ると、武内先生は授業内容の説明をし始めた。ほとんどの生徒が下や横を向いていて、先生の話は真剣に聞いていなかった。
私は左後ろの方をちらりと見た。私はクラスで四番目に背が高く、明希は背が小さい方だから、立ち位置が離れていて姿がよく見えない。でも多分、辺りをキョロキョロと見回していて、落ち着きのない様子の、あの子が明希だろう。落ち込む様子すら見せていない明希を見て、私は脳の奥が明滅するのを感じた。
今日の明希は、なんだか様子が変だ。三時間目と四時間目の間の休み時間も、四時間目の授業中も、さっきの遅刻も。そのせいで、私は明希への陰口を散々聞く羽目になった。あの人たちの醜い悪意を、久々に思い出す羽目になった。あの頃の嫌な気持ちと、同情と、憎悪が、沸々と蘇るようで、私の心中は穏やかではなかった。
なんで、授業中に手を上げてしまったの。授業中に手を上げるやつ、あれが嫌だって私が言ったから、聞いてくれたんじゃないの？なんで、授業に遅れてしまったの。そんなことをしたら、あんたがまた陰口を叩かれて、嘲笑の対象になるって分からないの？
分かるはずないか。話し声も笑い声も、あんなに近くで、嫌になるほどうるさく響くのに、明希には全然聞こえないんだから。
日差しがジリジリと強まって、足元に黒色の濃い影を落とした。首筋から、冷たい汗が流れ落ちる。今は武内先生の話し声しか聞こえないのに、僅かに動悸がして、なんだか泣きそうになっていた。もう明希が、妙な行動を取って注目を浴びないことだけを、ただ祈っていた。
「――お前ら、分かったか？じゃあ、さっさと初めの定位置に着けー」
武内先生の説明が終わったようだ。話はほとんど耳に入っていなかったが、前回とやり方は同じだから、なんとかなるだろう。皆が駆け足で散らばる。私も定位置を探して、急いでそこへ向かおうと足を浮かした、その時だった。
「あの！先生！」
背後から、甲高く、透き通った声が聞こえた。明希の声だ。

足が止まった。明希の方を振り返る。向いた先には丁度大きな太陽があって、それが痛いくらいに眩しかった。
「なんだ、立花」
みんなが次第に立ち止まって、明希の方を向く。「また？」とか「何あいつ」とか呟く声が聞こえた。
待って、もう何も言わないで、と祈る言葉は、届かなかった。
「えっと、その。すぐ戻ってくるので、あの。授業は止めなくて、大丈夫なので。ちょっとだけ、あれ、見てきます！」
明希は一生懸命、大きな声でそう叫んだ。かと思えばすぐに、靴箱の方に向かって走り出した。湿った砂を力強く蹴飛ばす音が、静かな辺りに響く。水溜りを勢いよく踏みつけ、白い靴下が汚れたのも気にしないまま、走っている。
私も、先生も、クラスのみんなも、遠ざかる明希の背中を見ながら、ただ茫然としていた。
「――はあ！？」
男子の叫び声を皮切りに、グラウンド中が賑やかな笑い声に包まれた。みんなが視線を合わせて、明希の走る方を指差しながら、腹を抱えて笑っている。
「あらら、行っちゃった」
「え、マジで気狂ってんじゃん」
「やっぱホンモノの『G』は違うわ」
その騒音の中私は、ただ立ち尽くしていた。全身の血の気が引いて、地面に接しているはずの、足の感覚が無くなった。一人宇宙に放り出された気分だった。視界が歪む。肌に突き刺さる日差しが痛い。
「……は！？おい、立花、待っ――」
「あー、先生。いいですよ、放っておいて」
菅野さんが、追いかけようとする先生を制止した。
「本人が言ってましたよね、授業止めなくていいって」
鋭い目付きで武内先生を見上げる、その口元は、緩やかな弧を描いていた。武内先生は、大きな体躯を揺らしながら右往左往している。
「いや、でも」
「先生じゃなくて、僕が行きます。それなら授業は止まらないし」
クラス委員の小泉くんがそう言った。菅野さんはすぐに小泉くんの方を振り向いて、睨みつけながら吐き捨てた。
「はあ？あんなやつに構わなくていいって」
体育祭の練習をしたい多くの男子たちが、「そうだそうだ！」と言って菅野さんに加勢した。
「あいつは、ああいうことする奴なんだって。一々お人好し発揮してたらさあ、うちらが

損するよ？」
小泉くんは狼狽えていた。ああ、二人は両想いなのかな、と思った。
「あんたも知ってんでしょ」
菅野さんは小泉くんの方に歩み寄った。男子たちは、早く走りたいと口々に不満を溢し、喧嘩に発展しそうな空気感に、女子たちはヒソヒソと何か話していた。
「あいつはさあ、『G』はさあ！」
菅野さんの張り上げた声が、グラウンド中に響く。皆が、途端に口をつぐむ。誰もが続きを理解して、期待して、怯えて、ただ黙って立ち尽くしていた。菅野さんが、一瞬、ニヤリと口角を上げる。
ああ、止めて。お願い言わないで。その先を口にしないで。
私の両手は、徐々に持ち上げられて、左右の髪をぐしゃっと掴んだ。耳の全体を覆って、頭蓋骨を潰すみたいに、力強く掌を押し付けた。キーンと、脳を貫く音がする。目を思い切り閉じて、ゆっくりと息を吸う。
「立花明希は、――――なんだって！」
彼女の叫び声は、聞こえなかった。
「――ねえ、もうやめて！！」
代わりに、誰かの悲鳴が聞こえた。
その瞬間、私は勢いよく走り出していた。遠くに見える、靴箱の方へ向かって。明希を、追いかけるために。
菅野さんと、武内先生が、後ろで何か叫んでいたけれど、私には全然聞こえなかった。がむしゃらに足を動かす。視界が白い。音が遠い。グラウンドの砂を蹴るたびに、ざっ、と湿った音が足元で弾ける。水溜りが、割れたみたいに音を立て、足元に水飛沫が飛んだ。速く、もっと速く、明希の所へ。鼓動が速い。息が苦しい。どこか遠くへと消えてしまった明希の所に、私は行かなければいけない。
明希に、言わなきゃいけないことがある。きっと、言わないままの方がいいこと。頭がはち切れそうで、自分を最低と罵る暇さえなかった。
背後から、波が追いかけてくる。それを振り払って、逃げるようにまた走った。何も聞こえなくて、それでも何を言われているかは分かって。泣きそうなくらい怖いけど、もう立ち止まれない。
泥みたいな砂に、足が引っ掛かる。地面を、強く蹴飛ばす。明希は多分、靴箱の裏にいる。さっき、そう口にしたのを聞いた。靴箱のある方の校舎裏は、フェンスに囲われた、草木の生い茂る人気のない場所だったから、少し不安になる。でも、そこ以外に考え付かない。
滲む視界の中で私は、必死に校舎裏を目指し走った。
靴箱の前にたどり着いた。ひび割れた白いコンクリートの壁に手をつき、呼吸を整え

る。後ろからは、誰も追いかけてきてはいないようだ。
この建物の裏に、明希はいるのだろうか。
逸る心臓を抑えながら、裏をゆっくりと覗き込む。地面は雑草に覆われ、左側には木々が生い茂っていた。
すぐに明希の姿が目に入る。薄暗く湿ったその場所の奥に、明希は立っていた。右側の靴箱のある小さな建物から飛び出した屋根の下、角になっている部分に、明希は手を伸ばしている。背中を向けているから、私が来たことにはおそらく気がついていない。
私は右側の壁に手をつき、明希に向かって呼びかけた。
「……明希、何してんの」
私が声をかけると、明希は小さく肩を震わせた。
「え？なんで君がここにいるんですか？」
伸ばした手は下ろさないまま、明希は顔だけをこちらに向けた。
「いや……明希こそ、何で急に授業抜け出して、こんなとこにいんのかって、聞いてるんだけど」
左手を強く握りしめて、私はそう言った。
「あ……それはですね」
明希はすぐに笑顔になり、高く上げていた両手をぱっと開いて、その後ろに隠れていた屋根の下を見せた。小さな建物の、小さな屋根の下。そこに、大きなツバメの巣があった。
四羽のツバメの雛が、その中にいた。私は目を見開いた。
「……何、それ」
「ツバメの巣です」
「いや、見れば分かるけど」
「数時間前の暴風雨で、巣が壊れてないか心配で、見に来てしまいました。案の定、雛が一羽、地面に落ちてしまっていたので、さっきまでその子を巣に戻していたんですよ」
明希は幸せそうに笑いながらそう言った。明希の背後で、ジュピッと雛が囀っている。
頭の中で、何かが弾ける音がした。
「……じゃあ明希が、四時間目の授業中、手を上げたのも」
「ああ、あの時。風や雨の音が強まっていたので、どうにも心配になって、手をあげてしまいました。あ、君に嫌がられていたというのも、頭にはよぎったんですが。すみません、怒ってますか」
「……馬鹿じゃないの」
「え？何ですか、よく聞こえな――」
「馬鹿じゃないのって、言ってんだよ！！」
私の叫び声が、辺りに反響した。
ああ、言っちゃった。言わなきゃいけないこと。きっと、言わないままの方が良かった

こと。クラスの誰もが言っていて、私だけは言ってこなかったこと。
喉の奥が痛い。握り拳が震えて、呼吸が乱れる。
明希に傷ついてほしくない、悪意に気がついてほしくないと、願う私が負けた。もう止まれない。戻れない。
「ツバメが心配って、何それ。そんなこと、あいつら、全然知らないんだよ。私だって知らなかった。言わなきゃいけない分かんないじゃん。分からないから、みんな明希のこと散々馬鹿にして、笑って、酷い呼び方だってする。もっと躊躇って、手をあげたら笑われるって、怯えてよ。なんで、なんでそんなことが出来るの。優しいあんたが、無駄に傷つくだけじゃん。だったら黙ろうって、何で思わないの？なんで、あの声が、悪意が、あんたには聞こえないの？」
今まで必死に頭の奥に押し込めてきた言葉たちを、全て明け透けに曝け出す。
「あんた、陰でなんて呼ばれてるか知らないの？あんたが校庭から走り去った後、あいつら、明希のこと、ひ、酷い呼び方してさあ。菅野なんて、だって、明希のこと――――」
息が詰まった。こんなこと言いたくない。その瞬間、頭の中の言葉が勢いよく解けて消えた。私は、それ以上、もうなにも言えなかった。
息が切れて、肩が上下する。呼吸を整えながら、明希の方を見た。ぼやけた視界の中で明希は、おそらく、呆気に取られた顔をしているのだろう。
「……あの」
しばらく経って、明希が口を開いた。戸惑いも、傷心も感じ取れない、至って普通の声だった。
「……何」
私は冷たく吐き捨てた。
「その、みんなの悪口ですけど。聞こえてますよ、全部」
「……え？」
明希は遠慮がちにそう言った。私は目を見開く。
聞こえてる？聞こえてるのに、あんなことをするの？聞こえてるなら、もっと怯えて、立ち止まるはずでしょ？
「聞こえてるなら、なんで、あんなに堂々と行動できるの？怖く、ないの？」
「うーん……」
明希は少し悩む素振りを見せた後、ゆっくりと私の方へ近づいてきた。
「小学生の頃は、そういう陰口みたいなもの、全然聞こえてませんでした。馬鹿にする意図の笑い声にも、皮肉も、全然気がつかなくって。クラスの優しい子に教えてもらって、初めてそれを知りました。あの子たちの言ってることは悪口なんだよって」
明希が一歩一歩、私に近づいてくる。私は黙って、その姿を見つめていた。
「凄くショックでした。それから何にも話せなくなって、周りの人の話し声が、全部悪口みたいに聞こえたんです」

「……そんな、それって」
私と同じだ。あの頃の、私と。明希にそんな感情があったなんて、知らなかった。ずっと気づかないで、聞こえてないんだと思っていたから。でも、じゃあなんで。
今の明希と私は、こんなにも違うのに。
「でも……それに耳を傾けることをやめなかった。周りの声を、ちゃんと聞こうとした。そうしたらね、案外、悪いことを言ってくる人ばかりじゃないんですよ。心配してくる人、気にかけてくれる人、味方になってくれる人。そういう人の声が聞こえるだけで、もう大丈夫になるんです」
明希は軽く飛び跳ねるみたいに最後の一歩を踏み込んで、私の目の前に降り立った。私は咄嗟に、顔を下に向けた。
周りの声に耳を傾ける、なんて、私はしてこなかった。だって、酷いことを言われているって分かっているんだから。全ての声を遠ざけて、ただ耳を塞ぐばかりだった。
明希は強いんだ。私なんかよりも、ずっと。
「……明希は、聞き分けられるんだ。悪意の籠った声と、そうじゃない、味方の声が」
「はい。君には、出来ませんか」
そんなの、出来るはずない。私は、明希じゃない。明希みたいに、強くない。私には、全部が私たちに向けられた悪口に聞こえて、それは今でもそうだ。
「一年二組の人たちは、確かに怖いことを言ってくる人たちもいます。でも、クラス委員の人とか、酷いことを言ってくる人に対して『最低だな』とか言ってくれるし。君と仲の良い黒い髪の人も、たまに悪口から庇ってくれるから、好きです。あとは、担任の先生もすっごく優しいです。大きな声が苦手だって言ったら、なるべく出さないようにするよって言ってくれました」
はっと、視界が開けたような気がした。きっと、私はそれを知っている。ちゃんと見て、聞いている。なのに、私はその全てを悪意だと決めつけてきた。
周りの声がちゃんと聞こえていなかったのは、私の方だ。
それなのに私は、明希に同情したふりをして、近づいて、利用して、でもまた陰口を言われるのが怖くて、わざと冷たくあしらった。
「ごめんなさい、私、明希が全部聞こえてるなんて知らなくて、冷たい相槌ばっか打って。本当に、最低で……」
「でも、君は話を聞いてくれたでしょう」
明希が、私の両手を掴んだ。
「鳥の話、みんなつまんないって言って聞いてくれませんでした。お母さんもお父さんも小学校の先生も、みんな適当な返事だけして、最後は無視してきました。凄く悲しかったです。鳥の話をするのが、怖くなった」
私はもう、続きを聞きたくないような気持ちになっていた。でも、私の両手は明希の手に優しく包み込まれていたから、耳は塞げない。

「入学式の日君は、鳥の話をしてくれましたよね。凄く嬉しくて、たくさん話してしまいました。その日は帰ってから話しすぎて嫌われたかも、と反省しました。でも、それからもちゃんと話を聞いてくれて安心しました。「」が何なのか尋ねられた時、凄く嬉しかったです。この人は興味を持って、理解しようとしてくれる人なんだ、って。返事は適当でも、なんだか今までの人たちとは違いました。ちゃんと聞いてくれてるって分かったから。だから安心して、たくさんお話ししてしまいました」

明希の背後で照る太陽が眩しい。視界が揺らぐ。明希の声が、私の顔の目の前で明るく響いていた。

「だからこそ、君に無視された時は、すごく怖かった。世界に一人ぼっちの気分でした。理由が分からないのが、怖いんです。多分自分が、迷惑をかけたんでしょうけど、それが何なのか、分からない。でも、君はちゃんと理由を教えてくれました。明希が授業中に手を上げるからだって。だから嬉しかったです」

それは私が適当に繕った嘘で、私があの時明希を無視したのは、単なる八つ当たりだ。それなのに明希は、その嘘に救われちゃったんだ。今更、後ろめたさが私を襲う。

「それは、違うの。無視したのは、私が、最低なやつだから。あんたと違って……」

「君は、優しい人ですよ。毎回の休み時間にトイレのある反対側の廊下まで連れて行ってくれるのも、悪口から遠ざけてくれてるのかと思ってました。あれ、違いましたか？」

違う、と言おうとして、私は口をつぐんだ。

私は、教室中に響く陰口が明希に向けられたものだと知ってからも、休み時間に教室を出る習慣を続けた。明希の話を聞いていれば陰口は聞こえなくなるのだから、別に教室で明希と話をしたってよかったのに、なんでわざわざそんなことをするのか。

明希には陰口が聞こえていない。私もクラスのみんなも、それを信じていた。でも、もしかしたら私は、明希にちゃんと陰口が聞こえていることを、心のどこかで恐れていたのかもしれない。

「……分かんない、分かんないけど……ごめん、明希……」

「うーん。すみませんが、君が何に謝ってるのか全然分かりません。君に救われたと、さっきから言っているじゃないですか」

明希は、私の手をぎゅっと強く握った。

「だから、夏凛。もうそんなに泣かないでください」

ふっと優しく微笑む明希の顔が、私の視界の中で淡く滲んで、崩れた。温かい雫が頬を湿らせる。

ふいに、世界の全てを攫うみたいな風が吹いた。咄嗟に髪を抑えた左手から、溢れた細い毛の束が光の中で白く照らされ、鼻先をくすぐる。

私は口元を歪めて、「泣いてない」と言った。

明希は声を上げて笑った。

「あ、一つ嘘をつきました」
校舎裏を抜けて、二人で校庭へ戻ろうと歩いていた時、ふいに明希が口を開いた。
私の手を引く明希が突然立ち止まったから、私も驚いて足を止める。
「嘘って、何？」
明希の方を向いて、私は言った。
「確かに味方になってくれる人の声を聞くとそれなりに心は落ち着きますが、全然大丈夫にはなりません。だってあんな酷いことを言われてるんですから。帰ってから、家でたくさん泣いてます。布団に顔を埋めて、号泣です」
明希が凄く恥ずかしそうな顔をしてそう言うから、私は笑った。
「明希もそういうことするんだ」
「はい、します」
「私も、同じ」
その時、先ほどまでいた校舎裏の方へ、一匹の鳥が飛んでいくのが見えた。
「あ、あれ……」
「ああ、多分、親のツバメが餌を取って戻ってきたんでしょう」
「あれは……白と黒の身体だから、イワツバメ？」
「あ、正解です。よく見えましたね」
明希はそのまま前を向き、私の手を引いて歩きだした。私は急いで、その後ろに着いていく。
背後から微かに、ツバメの鳴き声が聞こえた。